

少年音楽家 (五)

五、週子外れ

東京女高師教授 岡田美津

新右衛門の家の納屋で死人があつたといふので、村中響動き渡つた。それがまた種々の點で類の變はつてゐる事件なのだつた。第一は男の子の點で、村の人達は、男の子供の事なら何でも心得てゐる積りでゐたのが、こんどのに出遇してからは、やつぱり子供の事は解らないものと思ふやうになつた。第二は、その子と父親とが無宿者みたやうな格好で、村へ來たのであるが、その晩途中で二人を馬車に乗せてやつたと吹聴する銀田が、二人を普通の無宿者とは思はないと臆せず言張る事だつた。

死人の衣囊には二通の手紙の他に、何も人つて居なかつたし、バイオリンの買手も見附からないので、遺骸は村の費用で埋葬してやるより他に、しやうがなかつた。此事を民雄には誰も言つて聞かせなかつた。銀田が父親の手紙を渡してやつた以來、彼の耳へはなるだけ何も入れないやうにしてあつた。あの

朝、村の人達は、銀田の言ひ草ではないが、「何かしら聞き出さう」と今一しきり骨を折つて見たが、民雄の答は當てはまらなくて、頼りにならなくて、聞手の方で途方に暮れさうなのであつた。そんな風なので、此の子は「ちと變なのだ」と大概の人は思つてしまつて、相手にせずにと置くといふ事になつたのである。

死人が何者だか、村の役人には無論知つたものはなく、また探り出す事も出来なかつた。當人の書いた姓名は判じ讀む事が出来ないし、手紙の中には何も書いてないし、その子は、役に立ちさうな事は何も承知してゐなかつたのである。もつとも、山中の村から噂が傳はつて、男と子供とが路もない山奥の小家に住んで居た事は分つたが、それだけでは、この謎を解く補足にはならなかつた。

民雄は、新右衛門の家にそのまゝ居た。新右衛門は、この子を引取るうといふ人を少しも早く見付け

やうと心の中では定めてゐた。

事件のあつた日に、銀田は新右衛門の裏庭から馬車を乗り出す支度をして、手綱を持ちながら、民雄の事だといふ振りをして見せて、

「新右衛門さん、如何したものだらう。誰か欲しいといふまでこの子を此處へ置いとかうかね」。

「ウム——まあ——そうとでもして置かうか」。

と新右衛門は、せうことなしに、無愛想に言つた。

後に徘徊してゐた御内儀さんは、すぐ進み出し、
「え、さうしませう。」と言つて、良人に勧めるやうに「子御前さん、この子はちつとも厄介ぢやない子」「厄介でねいかもしれない」と新右衛門は意味あり氣に讓歩して「そのかはり役にも立ちッこあるめい——受合ひだ」。

「まつたくだ」と、鳥山は馬車の中から口を出して、
「こいつがちつとでも役に立ちさうなら、俺が引取つてもいゝが——あれだ、一寸見なせい」。

と彼は侮るやうに肩を聳かした。

民雄は階段の一番下の段に腰を下ろして、今の話を一言も聞いてゐなかつたらしく、感じ深さうな顔を活氣附させて、父さんの手紙に讀み耽つて居た。

ガヤ／＼した話聲には氣も止めなかつた彼も、急に静になつたので、不圖頭を擡げた、その眼は星のやうに光つて居た。

「父さんが僕の爲る事を教へて下さつたから、ほんごに僕嬉しい。これからはよつぽど樂だ」。

大人達が妙に黙りかへつて居て、返事もしないので民雄はもつとよく説明するつもりか何かで、

「あの子、父さんは僕を待つてゐるのですよ。すつと遠い國だね。待つて居ると書いてあるんです。待つてゐる人があると思ふと、すこし位自分が遅れるのはさういやでもありませんね。それは僕は美しい世界の事を知るために、是非此處に居なくちやならない、僕が行きついた時父さんに御話が出来るやうに。山の家に居る時分も始終そうだったんです……父さんにいろんな事を御話したんです。いく日も／＼散歩に出ていつてね。そして家へ歸ると父さんが僕に見て來た事をバイオリンで話を御させなすつたんです。今は父さんが僕に此處に居ろつて仰るの」。

「此家に？」。

と新右衛門は怖い聲で性急にいつた。

「え」と民雄は眞面目に頷いて「美しい世界の事を
知るために。予さう書いてあつたでせう。山の家
へ歸りたがつてはいけないつて。また歸りたく思
ふにも及ぶまいつて。何故さいふと、山も空も鳥
も栗鼠も小川も僕のバイオリンの中にあるのです
からね、そして……」

新右衛門は、平藏に跟いて來いといふ身振をし、
澁面をしてツン／＼歩いて行つてしまつた。銀田は
興あり氣な顔をして、小聲に笑ひ／＼、馬の向きを
變へて馬車を御し去つた。民雄は、新右衛門の家内と
唯二人になつた。家内さんは、少し不氣味さうな眼
付で、つく／＼とこの子を見やつてゐた。

「朝の御飯を欲しいだけ食べたかへ」
と恐る／＼訊ねた。御家内さんは、この不思議な
子が、なるたけ變でなく、なるたけ人間らしく見え
てくれるやうにと、食事の事などを、昨夜と同じく、
話の材料につかつて見たので。

「え、澤山」民雄の眼は手にある父の手紙にまた移
つていつたが、急に意味ありげに見上げて、

「無宿者ッて何ですか。よその人達が、父さんと僕
の事を無宿者だつて言つたのです」。

「無宿者？それはね……あの……まあ……無宿者
で、でも民雄そんな事はどうでもいゝよ……そん
な事を考へない方がいゝよ」

「でも無宿者ッて何ですか」と民雄は固執し聞き返
した——瞋の炎を眼に見せて「もし泥棒ッていふ事
なら……」。

「そんな事はない。泥棒の事なんかではありはしな
い」と御家内さんは、宥めるやうに遮つた。

「それちや無宿者ッて何ですか」

「それはね……まあ歩いてる事さ」と御かみさんは
切羽つまつて「村から村へと歩いてね……そして何
處ツて家に住まない事」

「あーさうですか」と民雄の顔から曇りが消えて、
「そんならいい。僕は無宿者なのが好きですよ。き
つと父さんもさうだ。父さんと僕と時々無宿者で
したよ、夏なんかいくども／＼さうだつた。さうつ
とも家に居なかつたんです……一日中、夜も戸外
で暮らしましたよ。夜、松の樹の下に寝てゐて、
その音をきいて、僕はじめて松のいふ事がほんと
に解りましたよ。僕のこの意味があなたに分るで
せう。あなただつて、松の音を聞いて知つてゐる

ンですからね」

「夜？松の樹の？」と御かみさんは途方に暮れた。

「え、あなた、夜、松の聲を聞いた事がないの」

と民雄は、惜しいものを聞き落としてゐると、心から同情の聲を出して。

「あのね、晝間だけ聞いたのでは松がほんとにどんなものだから分りませんよ。僕教へて上げませう。

聞いていらつしやい。松はかういつてゐます」

と言つて、民雄はバイオリンを函からさつと出して、素早く調子を整へ、凄い、人に逼るやうな小さなメロデーを奏でた。

臺所の戸口に御内儀さんはイんだま、惑ひつゝも、魅せられたやうになつて、光るかどばかりに見える民雄の顔を、怖れつ懐かしみつ見据ゑてゐた。

新右衛門が家の横手から出て來ても、御かみさんはまだ聞き惚れて居た。

新右衛門は、此光景を無言の輕侮で見渡して置いてから。

「オイ御蓮、樂師の小悴の曲を聞いてゐるより他に、今朝は用事はねいのか」

「あ、御前さんかへ。用はあるンだとも。私や……

私やうつかりしてゐた」と彼女は悪い事でもしてゐたやうに赤くなつて、急いで家の中へ入つていつた。

階段のところ居た民雄は、何も耳に入らなかつたらしく、やはり遠い空を眺めつぐしながら、しきりに弾いて居た。すると新右衛門は、不機嫌な顔をして民雄に對つた。

「こら貴様はバイオリンを弾くより他に能はねいか」そういつても民雄が弾き續けてゐるので、男は聲も荒く。

「さこえねいのか」

樂の音がハタと止んだ。民雄は別の世界から呼び戻された人みたやうに、すこしポツとして

「何か仰つたんですか」

「そうよ。二度もいつた。そのバイオリンを弾くより他に、何も出来ねいかつて訊いたんだ」

「家でですか」と民雄は怒つたのでもなく、怨んだンでもなく、たゞ不思議さうな顔をして、

「え、出来るんです。始終弾いてゐるわけに行きませんから。僕食べたり、寝たり、勉強したりしなければならぬし、毎日散歩に行きました」

「あの無宿者みたやうにね」。

と説明した。そして、初めてこの人に分るやうな言語で話が出来たと思つて嬉しさうな顔をした。

「無宿者か―フン―」と新右衛門は口の中で呟いて、それから聲鋭く「役に立つやうな仕事をやつた事があるかい。貴様、毎日く、こんなに塗方もなく怠けくらしたのか」

民雄は意味がよく分らないので、また眉をひそめた。「怠けてはしなかつたんです。父さんが怠けちやいけないって仰つたから。どの楽器だつて「人生」のオーケストラでは入用なんだつて。僕は子供ですけれど、僕もやつぱり楽器だからつて。そして父さんが仰いましたよ、僕が黙つてゐて僕の弾くところを弾かないとハーモニーが完全でないんですつて。それからね……」

「よし、そんな事はどうでもいゝ」と新右衛門は焦心つたがつて「俺のいふのは、貴様の親父が仕事……」

ほんこの仕事をさせなかつたかといふ事だ」「仕事？」と民雄はまた考へた。それから急に顔を明るくさせて、

「え、僕には美しい仕事があるんで、その仕事がある中で僕を待つてゐるんですつて。それで山から降りて来たのです、その仕事を見付けに。あなたの言ふのはその事なのですか」

「その事ぢやない。俺は、仕事……家の中のほんこの仕事の事をいつてるんだ。そんな事を何もやつた事はねいか」

民雄は安心して笑ひ出した。

「あ、御飯の用意をしたり、掃除をしたりする事ですね、え、父さんと一所にしました。たゞね——（少年は顔をくもらして）——僕は上手ぢやなかつたんで、僕がすると豚肉は父さんのやうにバリバリによくゆかないし、箸はいつでも煮えそこなふのです」

「フン、豚肉に箸だ！」と彼は嘲つて、

「そんな事は此村では婦女のするこつた、男にはもつと他の事をさせるんだ。納屋の入口に薪切れが積んであるだろう」

「え」

「そんならな、臺所の薪箱が空になつてゐるから、貴様その中へあの薪を一杯入れられるか。短かく切

り割つた薪きんがいくらもあそこにあるんだ」。

「え、やります」と民雄は引受けた。いそいでしかも大切さうにバイオリンを函に納めて、すぐ、本氣で薪を運びにかゝつた。新右衛門は、暫時見張つてゐたが、その内に彼方へいつてしまつた。

薪の箱は一杯にならなかつた——すくなくとも容易に一杯にならなかつたのである。民雄は、二回目は一抱へ掻き寄せやうとした時に、地面に、長い間横倒しになつてゐた薪片が一つ目に入つた。それを拾ひ上げると、下に、種々いろいろの蟲が澤山足を出してウヨ／＼動いてゐた。面白くてたまらなくなつて、民雄は、薪箱の事なんかそつちのけにしてしまつた。

そして、今少し力を出して、今すこし根氣よく時間を掛けると、もつと太い薪片が地から離れて、その下には、もつと澤山脚があつたり關節くわんせつがあつたりする大きな蟲が居た。特に一疋素張らしいのがゐたので、民雄は悦びの聲を揚げて、早く出て見に来いよ、御内儀おかみさんと呼び立てた。あんまり呼ぶので、御内儀おかみさんは急いでやつて來たが、もつと急ぎ足で引返してしまつた。民雄は、薪山に腰をかけて、御かみさんは、自分の家の薪の下にゐる、こんな美しい面

白い動物を、何故身慄をして「オーいやだ」と叫び聲を出すのだろうと獨り怪んだ。

彼は臺所のかまどの後ろで、空の薪箱が待つてゐるのは忘れてしまつてゐた。

一羽蝶が飛んで來た。大きな黒羽の金線入りの蝶で、ヒラ／＼と舞ひ上り舞ひ下つて裏庭から花島の方へと飛んでいつた。民雄は、そつと音を立てぬやうにしてあそを追つていつた。蝶は花島から果物島へ、果物島から花島へと狂つていつた。それと同じに民雄も行つた。そして花島の中で彼は御かみさんの作つてゐる三色堇すみれの花壇に行きあたつた。それを見るとき蝶の事はもう忘れてしまつて、彼は花壇の前に、拜まぬばかりに膝をついてしまつた。

「御まへ達は、人見たやうだな」とかれは小聲で話した。

「みんな顔がある。嬉しさうなものもあるし、悲しさうなものもある、御前——ポツ／＼のある大きな黄色いの——僕を見て笑つてゐるね。あ僕弾いてきかせやう。みんな御きき。きれいな歌になるよ、めい／＼ちががつた様子をしてゐるんだもの」

と軽く身を起して、かれは、バイオリンを取りに縁

へ驅けていつた。

五分ほどして新右衛門が臺所へ来て見ると、愈越しにバイオリンの音がきこえてゐる。その途端に、底の方に三四本の薪切れが入つたまゝ、薪入れが空でゐるのが彼の眼に入つた。新右衛門は、苦々しい顔をして戸外に出て、家について花畠あぐらの方へ行つて見ると、民雄が三色葦の花壇の前に安坐して、頸にバイオリンをあて、恍惚として弾いてゐた。

「こゝら、貴様、こんな真似が薪を入れるツてどこか」
と男はピリツとする調子で怒鳴つた。

民雄は頭を振つた。

「いゝえ。この曲は薪を入れてるのぢありません」
と笑つて音を弱めたまゝ弾きつゞけて「あなた、さう思つたのですか。今弾いてゐるのは、この花の事なんです。人見たやうな顔をしてゐませう。それから、笑つてるの、そこにある大きな黄色いのは」
と言ひ了つて、彼は軽い賑やかな浮き立つやうなメロデーを奏しました。

新右衛門は、壓しつけるやうに手を揚げた。その様子を見て、民雄は曲の最中に手を休めて、不思議千萬などいふ風に眼を大きく開けて。

「あの、僕の弾き方が——いけないんですか」

「貴様の弾き方を言つてゐるのぢやない。薪箱を一杯にする事を言つてるんだ」

と新右衛門は、厳しく言ひ返した。

民雄は顔色を直して、

「あゝさう。今いつてします」と機嫌よく立ち上つた。「おれは、もつと前にしろと言つたぢやねいか」
民雄はまだ分らぬといふやうな眼をして。

「それは知つてゐます、僕やりかけたんです」と解りきつた事を面倒だけれど辛抱して、言つてきかせなければならぬといふ風に「けれど、いろんな、奇麗なものが次々に出て来て、僕この面白い人みたやうな花を見たら、どうしても弾かずにゐられなかつたんですもの。ねさうでせう」

「さうでせうぢやねい。おら、薪箱へ薪を入れると貴様に言つたんだ」
と新右衛門は、思ひやりもなく冷かに答へた。

「そんな時でも、僕は先へ薪の箱の方をしなければいけないツていふんですか」
「當りまへさ」

「だつて——僕の歌を——忘れてしまひますも

の」と彼は叫んだ。

「父さんが、曲を思ひついたら、すぐ弾くんだって、いつでも仰つたんです。曲は、朝霧だの虹みたやうなんで長く居ないものなのですから、いつてしまはないうちに、早く捕まへておかないといけません。さ、それで分つたでせう」

新右衛門は馬鹿／＼の骨頂だといふ身振をして、いつてしまった。民雄は、ジツとあとを見送つてゐたが、むづかしい顔をしてこれも臺所の方へ歩いていつた。やがて、彼は精を出して薪入れの業をやり出した。

今の事件が民雄の腑にどうも落ちないと見えて、彼は考へこんだ鬱いだやうな様子をしてゐた。そして晝食の前に、新右衛門に尋ねて見たけれど、やはり分らなかつた。彼はかういつて尋ねた。

「僕が、すぐと薪を入れなかつたから、僕は「不協音」だといふんですの」

新右衛門は呆れて問ふた。

「貴様が何だつて？」

「不協音なの——調子外れになる事なんです」と彼は根氣よく説明した「父さんがね……」。

新右衛門は、苛々して横を向いてしまつたから、民雄には、その問題はとう／＼解らぬまゝになつてしまつた。

○秋になりました。空の色にも、風のさゝやきにも、行人の姿にも、それと感ぜらるゝ頃となりました。淋しさな心の奥の奥から味ふにふさはしい時、じつくりと考へ、じんみりと物語るによい時が來ました。一年のうちで一番自然に親しむのに快い季節が來ました。無邪氣な子供等におとらずに私共も自然の寵兒となつて、野に山に天然の美を嘆じたいものです。

○かれてからお待ちかれの「幼兒に聴かせるお話」が表紙の廣告で御覽のごとくいよ／＼出來ました。今月下旬には皆様にお目にかかれる運びになつてゐます。體裁は優美に、内容は充實して。協會の育てあげたこの子は、また、きつと皆様に可愛がられることゝ思ひます。